

悪臭で充滿していた。また適当な場所に大便がしてあり、場所をさがすのが大変だった。

その後部隊はチャンギーへうつされた。ゴム林のなかだった。直ちに大型便所を掘った。地面にテントを張って八人くらいがはいった。地面にカップを敷いて寝るのである。スコールがきたら土地が湿って困った。一番困ったのは食料である。一日分ビスケット十二枚が主食で、夕食時配給された。子供のオヤツくらいである。

仕事はチャンギー飛行場の鉄板敷きであった。広大な飛行場へ鉄板を二重に敷くのだからびっくりした。鉄板はなが丸くくりぬいてあった。その鉄板を接続するため鋸を撃って固定するのである。太陽はまうえて輝き、したの鉄板は焼きついて熱く、地下足袋の裏はやわらかくなる。日陰のないところで作業するのだから体力の消耗がはなはだしかった。

「今日も 一日玉の汗

黒き腕よ 髭面よ

兵の寝息も 深かぶかと

チャンギーキャンプの 夜は静か」

の歌が流行した。

そして栄養失調になる者が多くなった。私も体をこわして入院した。

私のはいった部屋に戦犯にされた少尉の人がいた。隣の人が彼にボルネオで捕虜収容所の勤務だったと話した。彼は数日後、チャンギー刑務所で処刑されたと聞き、無念の涙を飲んだ。その頃、シンガポールの新聞には日本軍人の処刑の場面の写真が大きくのっていた。私は一面にのった銃殺の新聞を持って帰りたいと思った。しかし持ち帰ることが出来なかった。

内地へ帰る船へ乗船するよう通知を受けた。

昭和二十一年八月十七日、シンガポールを出発し、九月五日大竹に上陸復員した。

## 死の草原マリンプンよりの生還

和歌山県 脇村 英 一

「いまや八月六日から十五日にいたる十日間は、私達

が正気を取り戻す時間だ」と、作家大岡昇平は書いていたが、かつては異常な悲しみとみじめさを思い出し死者をついとうして、翌日から幸福な生活にもどることができたのに、今日では、その日常の方が不安で緊張に満ちていて、八月が平常心を取り戻す日と変わったのは悲しいことだ。

昭和十九年四月二十九日天長節の明け方、私は門司港を出帆、ニューギニア方面に向かう輸送船の甲板にいた。

八隻の輸送船団を護衛するのは航空母艦ただ一隻であるから、敵中を突破するのみであるとのこと、はたして無事目的地に上陸できるのかなんとも心もとないかぎりである。

フィリピンのマニラを出航してからまもなく、セブ島沖で敵の魚雷攻撃を受け船団は非常な打撃を受けたが、さいわい自分の乗船は、船首と一番ハッチの間を突き抜けたので沈没をまぬがれた。五月二十四日ようやくにしてハルマヘラ島ヤホールにたどりついた。

浮ドラムカンに薄板をしばりつけただけの浮橋のうえ

をよるけながら進み、ぱっとしめった砂浜に跳躍する。透明できれいな波がなぎさの砂をなめている。砂浜を軍靴でくぼませ、第一步を印した大地の感触はすばらしいものだった。

七月三十日ムナ島支廠要員として「グルワ」出発までの約一か月あまりは、宿舎の建築、港で荷役作業に従事したが、はげしい労働にひきかえ、食糧の給与は次第にわるくなっていった。

米はかびだらけの、鼠の小便くさいパサパサの外米に変わった。副食はさば、いわし、さけ、牛肉のほか乾燥野菜で、調味料は粉味噌、粉醤油、塩などであったが、しだいに分量をへらされていった。新鮮な野菜や果実は、ほとんど口にのぼらなかつた。

飲料水もひどいものであった。石灰質の隆起珊瑚礁からなっているのので、いくらろ過しても白だくしていた。転地して水が変わると誰でも必ず一週間は下痢をしていた。いわゆる硬水で、石鹼が泡立たなくてこまったものだ。

下痢をなおすにも衛生兵からクレオソート丸をもらっ

て服用すると奇妙になおった。

しかし平穩無事の日が当分続いた。その間に、ハルマヘラ島がどんな島かわかってきた。島の形態は、セレベス島を小型にしたような特異のK字型で、日本の四国とほぼ同じくらいの大きさである。全島密林におおわれ、山地は急傾斜が特徴である。五つの活火山は、いずれも一千メートル以上あった。

人口は五万人と推定されているが、昔は流刑の島であり、完全に文明からとりのこされた島なのである。

はじめてハルマヘラ島上空に敵機をみたのは、七月二十日であった。その後毎日のように一機か二機来襲したが、偵察が目的であったようだ。二十七日になると、ロッキードP 38戦闘機が、三十機以上の編隊で押し寄せてきた。大空襲によりこのままでは全滅になると部隊の約半数をムナ島廠要員として「グルワ」を七月三十日出発、転進した。

八月一日には途中無事にセレベス島「ビートン」港に上陸、兵站宿舎で約半月荷役作業に従事して、八月十七日、再び「ビートン」港を出発、空襲をさけて夜陰に乗

じて岸づたいに南下して二十六日無事マカッサルに上陸、ただちに陸路を北上してパレパレ東部の山地で自動車等の補強業務に従事していた。

セレベス島は、インドネシヤ中央部東よりにあるK字型の大島である（スラウエシ）。

面積は日本本州の約八〇%にあたる大きさで、人口約五万人の南部マカッサル（パンダン）と北部メナドの都市を除いては、小さな町や村が点在しているだけである。

この蘭領セレベス島を緒戦に占領したのは海軍航空部隊であった。爾後海軍の軍政下におかれた。私たちの上陸した昭和十九年八月の時点では、連合軍の反攻必至とみて、それにそなえるべく陸軍の精鋭関東軍が第二方面軍として転出してきてから約二年有餘、北東部に二万人南部に一万人の兵力をもって防備していた。海軍は南北にそれぞれ約五千人の兵力を配備しているだけで、陸軍が主力になっていた。軍司令官は阿南惟幾大将である。

私たちも、昭和二十年二月十五日には第二方面軍司令部に転属となり、連合軍の反攻にそなえて斬込隊の演習

を毎夜のように繰り返したのである。はげしい演習に引  
きかえ、食糧の供与はしだいに悪くなっていった。

主食の米は内地米とかわらないくらいいのセレベス米が  
十分であったが副食は缶詰もあまり配給されず、野菜も  
果実もほとんどないため、毎日の味噌汁は溝にはえてい  
るカンコンといってアクの強い葉っぱばかりで、今日も  
カンコン明日もカンコンと歌う兵隊が多かった。また肉  
類がなく、身体が要求するので、ねずみ、ねこ、いぬに  
とどまらず、とかげから野ぶた、猿に及んだので、つき  
は人間だとの心配から部隊命令で猿の食用を禁止した。

米濠連合軍の蛙とび作戦のため、セレベス日本軍は自  
活する捕虜だと、ニューギニアからボルネオにフィリピ  
ンにと跳び越えて、セレベス島には上陸せず、八月二十  
五日零時をもって勢作命第三百二十一号により作戦任務  
を解除され、十一月十九日勢命第六十九号により「マ  
リンパン」地区に集結を命ぜられ、約七か月の抑留生活  
にはいったのである。

マリンパン俘虜収容所は南セレベスのマリンパン草原  
(約四キロ四方)内にあり、周辺に柵や鉄条網は張りめぐ

らしてないが、自動小銃をもった歩哨を配置し、歩哨線  
を一步でも突破する俘虜があれば、その場で撃ち殺され  
るしくみになっている。俘虜に与えられた労働は、農耕  
作業や道路、橋の修復であった。

シベリアへ抑留された俘虜たちの重労働にくらべる  
と、南方諸地方の俘虜たちは、自給自足のための開墾、  
開発という名目のため、精神的にも肉体的にも、負担が  
軽はずである。南セレベスマリンパンに収容された軍  
人、軍属、一般邦人は、約二万人であったが、ほとんど  
茅、萱しか成育しない草原内の高地へほうりだされた  
かつこうで、とほうにくれた。他の抑留生活とくらべよ  
うもないので、集団餓死へおいやられたような、連合軍  
の極悪非道を感じたらしい。西部ニューギニアから栄養  
失調のため骨と皮ばかりになって移送されてきた俘虜の  
一群が、「死の草原」の農耕に立ち向かった時、「ここで  
トドメをさされるのか」と思ったらしい。事実また、彼  
等はバタバタと倒れていった。

「死の草原」マリンパンは、第一次大戦中のジャワ移民  
及びドイツ軍俘虜が、ほとんど死にたえたといういわく

つきの「地の果て」なのだそうである。先着のものにおどかされた。連合軍は、こんな荒野にほうりこんで「いもをつくって白活せよ」といったらしい。

私たちは、まず宿舎の建設、井戸掘り、ジャングルの開墾、堆肥づくりと分担に分かれて作業にはげんだ。直徑二メートルのあなを掘り、堆肥をしきつめて水もれを少なくし、日本種のだいこん、きゅうり、なす、かぼちゃなどを栽培した。

井戸水のかんがいと堆肥の効果で天候に恵まれて、たちまち豊富な野菜がせいいくし収穫された。

野菜が豊富になった一方では、激しい労働のため、身体は肉類を要求するので、我勝ちにねずみ、犬、猫をふたたび食べ始めた。巷間よくビタミンBやC不足といわれるが、せいたくなことで、本島に餓鬼地獄に落ちると、身体が要求し、たとえばビタミンCが不足すると緑をみるだけで満足（ある程度）するものだ。

俘虜の自給もやがて五月末になると全員内地送還が決まり、パレパレのトランシットキャンプに移動を命ぜられた。私たちは、インド兵の運転するトラックに乗って収

容所の門を出た。マリンプンより乗船、港パレパレまで二時間で到着した。六月五日の朝のことである。

六月九日、出港の復員船リバティは第二梯団にあたり、南セレベスの日本人はすべて引き揚げを完了する。第六梯団には私たちのような兵器引き渡し等の残務整理者がほとんどで、受刑者も同乗したことは痛ましかった。午後五時、抜錨、出港の汽笛が鳴った。なぜか、船内は静まりかえった。万歳の声も、軍歌の合唱もない。戦時中の船出とは違う。みんなでじっと汽笛に耳を傾け、ゆるやかに回転し始めた船体をデッキにもたれて眺めながら、万感の思いにたえているようだ。陸岸は動き、静かに遠ざかる「さようなら、さようなら」……心で叫ぶが声にならなかった。

私は生涯最大の喜びを、じっと一人かみしめていた。